Bluff Archives News Letter

第7号　2026年4月
発行　　NPO法人横浜山手アーカイブス

横浜山手のある国際結婚 ～エリスマン夫人のこと～

石川志満さん（写真提供：エリスマン邸）

この着物姿の美しい女性をご存知だろうかー彼女は、フリッツ・エリスマン氏夫人、**石川志満**（しま）さん。元町公園内にある洋館 エリスマン邸の建主の夫人である。今から100年前の1926年に建てられた旧エリスマン邸は山手127番-Aにあり、鷺山を越して根岸の海をはるかに望む崖上に建っていた。半世紀以上経ち、老朽化した建物は1982年に発見され、部材保存の後、1990年に現在の場所へ移築復元された。

設計者は、**アントニン・レーモンド**（1888-1976）。チェコ生まれの建築家レーモンドは大正8（1919）年帝国ホテルの建設に際し、フランク・ロイド・ライトの助手として来日、日本国内に数多くの建築物を残したが、横浜でも多くの作品を手がけた。エリスマン邸は、彼が師の元を離れて独立し、米国建築合資会社を設立した頃の住宅作品で、一階は押縁竪羽目板張り、二階は下見板張りと異なる外壁を持つ、簡素でモダンな木造住宅である。

F. エリスマン氏と石川志満さん

建主の**エリスマン**（F.Ehrismann）氏（1867-1940）はスイス・チューリッヒ出身。明治21（1888）年21歳の時に来日し、シイベル・ヘグナー商会の前身シイベル・ブレンワルド商会で働く。同社は横浜で生糸貿易を中心に時計の輸入も行う大手商社で居留地90番-Aにあった。若い頃 氏はここで居住しながら働いていたようだが、 DIRECTORYによれば1900年には代理人となり、一時神戸支店に移った後、1917年横浜支店に戻り、支配人格となる。1918年から127番-Aに住まうが、関東大震災によって家屋は倒壊し、同社のオフィスと倉庫を設計したレーモンドに依頼し、自邸を新築したと思われる。エリスマン邸には、当初二階建て洋館に平屋の和館が併設されていた。立派な床の間のある純日本風の和館は氏の日本人の妻・志満さんの居住空間であったようだ。

エリスマン氏と志満さんがどのようにして出会ったのかは定かではない。明治時代、外国人との婚姻を認める規則（太政官布告第103号）が交付された1873年から1897年までに許可された国際結婚は265件、日本人女性を妻とした外国人男性は172件あるが、事例には氏の記録は見当たらない。※

大正期に山手居留地に住んだ米国人女性セオダテ・ジョフリーは「“マダム・バタフライ”が典型的な日本の情景であった時代はすでに終わっている。最近では日本の婦人と生活を共にしている白人男性は、多少の不条理を克服して、正式に結婚する」と書いている。その頃は理不尽な偏見もあったようだが、国際結婚に踏み切った白人達は皆資産家であり、献身的な日本女性との結婚は満足な生活であったようだ。

当時、日本の蒸し暑い夏を避けるため外国人の多くは別荘を持っていたが、エリスマン氏も金沢区の富岡海岸、慶珊寺のそばに別荘を所有していた。富岡は有名な政治家や実業家などが別荘を構えた景勝地。二人は友人や取引先の関係者とともに別荘で過ごすこともあり、その様子を古い写真（個人蔵）から知ることができる。

エリスマン氏は、晩年シイベル・ヘグナー商会を退社して北海道貿易を起こすが、事業はうまく行かず、二人がエリスマン邸に住んだのは10年足らずであった。

夫妻に子供はなく、近所の親しい女性を養女にしたいと願ったようだが、一人娘で叶わなかったとも言われている。

志満さんが眠る石川家のお墓は、日本の吹奏楽発祥の地である妙香寺の一角に優美な装飾のある鉄柵に囲まれて立つ。墓は震災時に亡くなった母上を葬るため、大正14年に志満さん自身が建立したもの。昭和14（1939）年4月1日志満さんは病のため67歳で亡くなり、その後を追うかのようにエリスマン氏も翌1940年9月に亡くなる。氏は外国人墓地に葬られるが、周囲の計らいであろうか、石川家の墓にも「瑞西國人エフ・エリスマン」と刻まれ、同じ墓に眠る。　（N）

<引用・参考資料>
『エリスマン邸　移築復元事業報告書』横浜市緑政局公園部管理課　1991年
『ブレンワルドの幕末・明治ニッポン日記』横浜開港資料館編　2015年
※『国際結婚 第１号』小山騰著　講談社　1995年
『横浜ものがたり 』セオダテ・ジョフリー著　中西道子訳　雄松堂出版 1998年
本稿に関する資料提供をエリスマン邸及び利根川あい子氏にご協力いただいた。